

# 東日本支部だより

2010年3月3日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

## 定例研究会のお知らせ

### ◆東日本支部第49回定例研究会

時 2010年3月13日(土)午後1時30分～4時30分

所 亜細亜大学 2号館244教室

(JR中央線武蔵境駅北口から徒歩12分、または北口からムーバス「境西循環」「境・東小金井線」に乗り「亜細亜大学南門」下車)

\*当日は会場付近にて別の研究会もございますので、ご注意ください。

### ○2009年度 卒業論文発表 (その1)

1. 愛知県三河地方の民俗芸能チャラボコについて

市古有希(お茶の水女子大学)

2. 九条兼実と音楽

—『玉葉』の音楽記事から後半生を中心に—

服部阿裕未(東京芸術大学)

3. 世阿弥能楽論書における〈音楽〉と〈身体〉の接点

—「機」という思想の広がり—

橋本かおる(東京芸術大学)

4. アメリカにおける尺八の受容

蟻川小百合(東京芸術大学)

### ○2009年度 修士論文発表 (その1)

1. 明治期倉刊婦人雑誌にみる箏・三味線習得イメージの変遷 —遊芸の花嫁修業化に関する序論的考察—

歌川光一(東京大学大学院)

2. クレズマー音楽の和音構造

—モーダル・ハーモニーの観点から—

森真理子(東京芸術大学大学院)

3. 藩校における積奠と音楽

井土まりこ(東京芸術大学大学院)

4. タイ音楽の伝統とプラシッド・シラパバンレン(1912-1999)の音楽実践

山下暁子(お茶の水女子大学大学院)

司会 高松 晃子(聖徳大学)

### ◆東日本支部第50回定例研究会

時 2010年4月3日(土)午後1時30分～4時

所 お茶の水女子大学 共通講義棟2号館102教室

(地下鉄丸の内線 茗荷谷駅下車 徒歩7分)

\*ご来校の際は、身分証明書をお持ちの上、正門をご利用ください。

## ○2009年度 卒業論文発表 (その2)

1. 歌舞伎の海外公演 —1993年のドイツ公演を事例に—  
田辺沙保里(お茶の水女子大学)
2. 宮沢賢治童話『やまなし』の音表現  
—サウンドスケープの観点からの考察—  
稲玉千瑛(お茶の水女子大学)

## ○2009年度 修士論文発表 (その2)

1. 20世紀以後華人による讚美歌の使用と創作  
—中国国内、台湾、北アメリカを中心に—  
蔣一唯(東京芸術大学大学院)
2. 南インドにおけるアーラーダナー現象の考察  
—ナーラーヤナ・ティールタのアーラーダナーを中心として—  
小尾淳(大東文化大学大学院)
3. ユーラシアにおける口琴の比較研究  
—キルギスとアイヌの口琴を中心に—  
ウメバエワ・カリマン(東京芸術大学大学院)
4. 日本における様板戯  
荻野珠(東京芸術大学大学院)

## ○2009年度 卒業論文発表 (その2)

3. 戦後日本におけるうたごえ運動の音楽的研究  
—『青年歌集』を中心に—  
野口由衣(東京芸術大学)

司会 岡崎 淑子(聖心女子大学)

## 定例研究会の報告

### ◆東日本支部第47回定例研究会

時 2009年12月5日(土)午後2時30分～5時

所 東京芸術大学音楽学部 5-301 教室

通訳(講演・報告2) 早稲田みな子(東京芸術大学)

司会 前原恵美(有明教育芸術短期大学)

### ●講演

ホワイト・ミュージアムとモースコレクション

Michale Lang (ホワイト・ミュージアム館長)

### ●報告

1. 何故、E.S.モースは『日本その日その日』の絵を描き  
変えたのか—E.S.モースコレクションにおける日本音  
楽関係資料調査報告—

茂手木潔子(有明教育芸術短期大学)

2. もう一つの『日本その日その日』

—E.S.モースの孫 キャサリン・ホワイトの手紙—

Lynne Huras (ホワイト・ミュージアム学芸員)

(発表要旨)

12月の例会では、E.S.モースコレクションに関する日本音楽関係資料について茂手木の報告とともに、E.S.モースコレクションの一部を所蔵するカナダのバンフのホワイト・ミュージアム(正式名称は Whyte Museum of Canadian Rockies)から招聘した館長と学芸員による講演と報告を行った。

大森貝塚の発見者である E.S.モースのコレクションについて東洋音楽学会の例会で発表した理由は、彼の著書『日本その日その日』全3巻(平凡社)に記録された近代日本の

音楽文化および音環境に関する多くの記述と連動する楽器コレクションの実態を紹介すること、筆者の「E.S.モースコレクションにおける日本音楽関係資料悉皆調査」(科研の海外学術調査)について中間報告することを目的としていた。

さらに、ホワイト・ミュージアムの館長・学芸員の発表を実現した理由は、この博物館にある E.S.モースコレクションの調査が、まだ音楽学の視点では行われてこなかったこと、そして、この博物館の創設者であるキャサリン・ホワイト(モースの孫娘)が行ったストーニー(カナダインディアン)の伝統文化保存行為が、祖父モースの日本における資料収集の考えを受け継いだ点の紹介が、本学会の趣旨に合うと考えたためであった。

この報告では、3人の発表について、まとめて報告させていただく。

1)まず、ラング館長の発表は、ホワイト・ミュージアムと設立者のホワイト夫妻についての概観、及び、E.S.モースの孫娘であるキャサリン・ホワイトの異文化理解の方法および伝統文化の資料収集が、祖父の血筋を受け継ぎ、彼の日本文化収集に影響されたものであることを資料と共に指摘した。講演の内容について、次に報告する。

講演では、まずホワイト・ミュージアムを設立したホワイト夫妻の紹介(夫ピーター・ホワイトの家族がバンフの開拓者であったこと、キャサリンの収集癖は祖父モースから受け継いだものであること、第1世代のストーニーとの親交)が行われ、特に、ストーニーとの緊密な親交によってその伝統文化を守ろうとした夫妻の姿勢が紹介された。また、キャサリンの活動と祖父モースの活動の近似性を、家族への興味、住居の姿、交通手段、建築、生活用具、共同体の様子、服装、音楽や楽器、信仰・葬儀等の項目別に、彼女がストーニーについて撮影した写真・描いた絵とモースが日本で描いた絵を比較して紹介し、彼女がバンフで行った活動が尊敬する祖父の影響下にあったことを指摘した。

2)茂手木の報告では、はじめにE.S.モースコレクションの

所蔵が、ボストン近郊のセーラムにあるピーボディ・エセックス博物館(PEM)とボストン博物館、そしてホワイト・ミュージアムに所蔵されている点について述べ、本例会では、PEMの資料に焦点を当てて報告した。報告の内容は次の2点である。

①PEM 所蔵の楽器の主な画像を紹介。紹介した楽器の主なものは以下の通りである。

雅楽の楽器(笙・箏・箏の舌・龍笛・楽太鼓および、楽太鼓台、琵琶)、宗教関係の金属打楽器類(鐃鈸、レイ、鈴杖、銅鑼、様々なスズ、曹洞宗などで使用の鼓、伏鉦など)、能や歌舞伎の楽器(平太鼓、縮太鼓、大小鼓など)、楽器を満開の桜に見立てて装飾を施した十三絃箏、一絃琴、尺八、一節切など。

②モースの『日本その日その日』が当時の便箋に書かれたことを紹介後、彼自身の描いた楽器や生活用具・生活風景の絵と、初版で出版された絵との違いを指摘した。異なる絵の例として、三味線の転軸の向きや琵琶演奏の左指の描き方の違い、笙の原画では17本の管が描かれているにもかかわらず、出版された絵では真ん中の管が消えている点を、原画のコピーと共に資料を配布して紹介した。多くの原画が刊行時に書き直されているが、この点について指摘したのは、筆者が初めてである。また、原資料に描かれたいくつかの音関係の絵(笏拍子、草笛など)が、刊行時点で削除されているのだが、原資料にあたることによって、モースの日本の音文化への強い関心を確認した。原画の方が正確な描き方をしているので、なぜ、この変更が行われたかについて、さらに出版時点の記録を探するなど、今後の調査が必要と考えている。

3)ヒュラス氏の発表は、キャサリンが日本滞在中に母親(モースの娘)に宛てた手紙に焦点を当てたもので、彼女はこの手紙を第二の「日本その日その日」と位置づける。手紙の内容を紹介するにあたって、ヒュラス氏はホワイト夫妻の来日に関しての祖父モースの影響に触れ、彼女が描いた日

本の風景や図版とモースの絵との共通点を比較提示し、キャサリンの日本滞在が『日本その日その日』を確認することを視野に入れていたと指摘した。この証拠として、日本からホノルル滞在時に、母親に『日本その日その日』の初版を送るように求めている点、本が届く前、同書を閲覧するためにホノルル図書館に何度も通っている点を述べた。さらに、祖父が滞在してから57年後の日本がどのように変化しているかを確かめなかった意図も手紙には記されている。日本滞在時には、E.S.モースと親交のあった宮岡恒次郎との交流もあった。手紙には、モースが日本で入手した精巧なミニチュアの店(楽器店、虫売り)についても述べられ、57年後に日本で出会った同じ情景への感動も、手紙に記されていた。さらに、モースの印象と同じく、日本文化の音が喧噪のなかで聞こえることについても紹介された。

この手紙は、近代の欧米文化が流入してきたことによって、どのように日本の文化が変化したかを証拠づける貴重な資料となり得るであろうと筆者は捉えている。ヒュラス氏が現在行っている手書き資料の活字化を待ちたい。

4) 今回のE.S.モースコレクションに焦点を当てた3種の発表の要点は、①このコレクションの存在が近代の日本音楽研究にとって重要な資料となりうることを提示した点、②カナダのホワイト・ミュージアムに所蔵されるモースコレクションの日本音楽資料の紹介と重要性、③ホワイト夫妻が博物館創設にあたって収集し、所蔵した多くのストーニー資料の存在が、E.S.モースの博物学の視点と共通であり、E.S.モースの日本滞在がなければこの博物館も存在していなかったであろうと類推できる点であり、この3つの視点を通して『日本その日その日』の重要な位置づけを確認した。

来日した二人の発表は、初めて日本で紹介される内容であり、視覚資料と共に具体的に紹介された。また、例会発表に当たり、通訳を担当して下さった早稲田みな子氏の通訳が非常に簡潔でわかりやすく、博物館のお二人の発表が成功したのは早稲田氏のおかげである。

(報告・薦田治子)

今回は、本学会員茂手木潔子氏がカナディアン・ロッキーの中心地バンフにあるホワイト・ミュージアムから招聘した2人の研究者の講演と報告を中心とした例会であった。

今日、民族誌は音楽学の研究手法として定着しており、その重要性は言を俟たないが、大森貝塚の発見者として有名なアメリカの博物学者エドワード・S.モースの著『日本その日その日』は、日本の音文化について多くのスケッチと記述を含み、すぐれた民族誌となっている。また日本から持ち帰ったコレクションの中にはたくさんの楽器が含まれており、これらは19世紀の日本の楽器の状況を知る貴重な資料となっている。一方、モースの孫キャサリン・ホワイトと夫ピーター・ホワイトは二人とも画家で、カナディアン・ロッキーの中心地バンフに住み着いて、カナダの先住民ストーニーの人々の生活や文化を描き、大きなコレクションを残した。1934年に夫妻で日本を訪れ、その折にキャサリンがボストンの母に送った手紙にもまた、当時の日本の音の民族誌的記述が含まれる。

例会では、はじめに、ホワイト夫妻の絵画とコレクションを所蔵するホワイト・ミュージアム館長の Michale Lang 館長から、モースの孫キャサリンとその夫ピーターについての紹介や博物館の収蔵品の特徴と概要を説明する講演があった。キャサリンはモース自身が最も信頼した孫であり、モースの日本関連のコレクションの一部は同ミュージアムにも所蔵されているが、同ミュージアムのコレクションの主要な部分は、夫妻が篤い信頼関係を結び、暖かく注意深い観察をおこなったストーニーの人々に関する文物や絵画、録音である。異文化に対する強い関心と暖かい視点は、キャサリンがモースから引き継いだ優れた資質でもあったという。

次に茂手木潔子氏により、モースコレクションに含まれる日本の楽器についての報告があった。モースのコレクションは、おもに、PEM (Peabody Essex Museum)、MFA (Museum of Fine Arts, Boston)、ホワイト・ミュージアムの3つの機関に分

蔵されるが、その中の PEM に所蔵される日本の楽器・音具資料調査の結果が 100 枚近いスライドによって紹介された。雅楽や能の楽器、仏教楽器、三味線、箏、尺八はもちろん、トシコリのような民俗楽器、馬鈴のような音具にいたるまでさまざまなものが含まれ、モースが、日本の音文化に対して系統的に理解をしていたことに驚かされる。モースの収集により、1870 年代の楽器や音具の実物が現在に伝えられている意義は大きい。さらに茂手木氏は、PEM が所蔵する『日本その日その日』の草稿と、刊本との比較を通して、両者の楽器描写に微妙な差異があることを指摘した。

最後にホワイト・ミュージアムの学芸員 Lynne Huras 氏から、キャサリン・ホワイトが 1934 年に来日した際、ボストンの母に送った手紙に含まれる日本の音楽関係の記述が紹介された。友人宅や劇場での三味線演奏について、それらの音楽があまり好きだと思えないのは、自分が日本の音楽やそれが伝えるストーリーをよく理解できていないからだとしている。このような文化相対主義的な視点は、アメリカの人類学的研究のなかで生まれ、20 世紀なかばに民族音楽学に大きな影響を与えたが、キャサリンはその視点をすでに持っていたことになる。それどころか類似した記述が 1870 年代のモースにもあったという。

モースもホワイト夫妻も音楽研究者ではなかったが、彼らの言説や絵画、コレクションは、日本とカナダ先住民の音・音楽文化に関する多くの情報を含んでいる。本例会は、過去の音の民族誌を掘り起こすことの重要性をあらためて認識させるよい機会となった。

なお、事前の例会通知にあった講演や報告のタイトルからは、企画の内容が見えにくかったように思う。内容が興味深いものであったにもかかわらず、参加者が少なかった原因のひとつがそのことにあったかもしれないと思った。

## ◆東日本支部第 48 回定例研究会

時 2010 年 2 月 6 日(土)午後 2 時～5 時

所 東京芸術大学音楽学部 5-301 室

司会 高松 晃子(聖徳大学)

## ●講演

十二ムカームの伝承と演奏技法

アブドケリム・ウスマン[阿布都克力木 吾斯曼]  
(新疆芸術学院)

(発表要旨)

ウイグルの古典音楽「ムカーム muqam」は、声楽、器楽と舞踊を含む総合的な大型組曲である。そのレパートリーと様式は地方によって様々である。例えば、カシュガル・ムカーム、グルジャ・ムカーム、クムリ・ムカーム、トルファン・ムカーム、ドーラン・ムカーム、クチャ・ムカームなどである。中でもカシュガルの「十二ムカーム」はその代表であり、音楽、文学、舞踊、戯劇などの芸術を巧みに使い、ウイグルの民の絢爛な生活、高尚な情緒、崇高な理想や探求を表現している。

体系化されたウイグルのムカームの最初の記録は、十六世紀のスルタン・アブドリシット・ハン時代のものである。この時代に、現在「十二ムカームの生みの親」としてしばしば語られるスルタンの妃アマンニサハンとその師匠ユスフ・カディルハンが、その体系化に貢献した。十九世紀後半、カシュガルの音楽家エリムとセリム兄弟、ヤルカンドのセテワリディらが、従来のムカームにダスタン部分とメシレップ部分を加えることにより、現在のカシュガル・ムカームの形式の基礎を築いた。1883 年にカシュガルのムカーム演奏家ムハメド・モラ(カルシュン・アホン)がカシュガル・ムカームをイリに持ち込んだといわれている。これはのちにイリで流行するのだが、カシュガル・ムカームの中のチョンナグマの部分はこの地域で受容されず、ダスタンとメシレップだけが残されている。

1950 年から新疆人民政府は、絶滅直前の状態で民間に

散乱していた十二ムカームに関心を持ち、その発掘、整理、記譜等に力を入れた。1951年7月から1954年8月までに、当時、民間で活躍していたトルディ・アホンやローズ・タンブールなどの演奏家をウルムチへ招き、その十二ムカームをワイヤ録音方式で録音した。のちにムカーム研究家の万桐書が採譜や整理を行った。80年代初めに新疆ウイグル自治区文化庁の中に新疆芸術研究所が設立され、新疆の各地区から集められた専門音楽家にムカームの研究と伝習を始めさせた。

しかし、ムカームの伝承状況についていくつかの問題がある。例えば歌詞の改良がもたらした問題、ムカームの古典的な演奏技法の伝承にまつわる問題などである。本発表ではムカームの伝承者の系譜を述べるとともに、現代の学校教育現場についても検討を行う。

(翻訳:アブドセミ・アブドラフマン[阿不都賽米・阿不都熱合曼])

(報告・柘植元一)

本講演はウイグル語で行われた。十二ムカームの系譜がこの伝統の担い手の言葉で語られ、漢語を介することなく日本語に翻訳されたという点で、画期的な講演であった。講演者と通訳アブドセミ・アブドラフマン氏による楽器の実演と相俟って、中国新疆ウイグル自治区に伝承されるムカームの実像が、中央アジアのイスラーム文化史の中に位置づけられた。

とりわけ興味深かったのは、二十世紀中葉から開始された録音と採譜によるムカームの整理作業の歴史的検討である。1960年に刊行された自治区文化庁十二木卡姆整理工作組によって採譜された『十二木卡姆』の楽譜が、音楽の実体からかけ離れていて、ほとんど実用に耐えなかったこと。1978年から1990年にかけて行われた第二次のムカーム整理作業とその成果としての1993年版楽譜、および1997年版『維吾尔十二木卡姆』の記譜上の問題点。そして2000年ウイグル音楽家による第三次整理作業が推進され、彼ら自らが

採譜した信頼するに足る楽譜が出現したことであった。

## ●研究発表

ウイグルの鼓吹楽について

アブドセミ・アブドラフマン[阿不都賽米 阿不都熱合曼]  
(東京芸術大学)

(発表要旨)

本発表では、ウイグル族の間に広く伝承されている「鼓吹楽 naghra sunay orunlash」、の演奏スタイル及び「ナグラ楽団」の編成について考察する。

ウイグル語のナグラ naghra はアラビア語のナッカーラに由来し、漢字では納格拉、奴古拉と転写される。西洋のティンパニの元になったと考えられるタイプの楽器で、西アジアから中央アジアにかけて広く分布している。ウイグル族のナグラの胴体は金属(鉄を溶かして鍋型に流し込んでできた)、錐体の形になっている。膜はロバの皮を張る。サイズと音質によってドンバク、中音ナグラ、高音ナグラの三つの種類に分けている。一方、スナイ sunay はダブルリード(複簧)をもつ筚篥で、オーボエの祖先である。このタイプの楽器は西アジア、中央アジア、そして北アフリカのイスラーム文化圏に広く見られる。呼び方は様々であるが、アラビア語ではズールナー、ペルシア語ではソルナー、さらにこの楽器は東漸して、中国でソオナ(唢呐)と呼ばれるようになった。

ウイグルの「ナグラ楽団」と呼ばれるアンサンブルは大型のナグラ(ドンバク)一つと小型の二対ナグラ二つ、そして木製のスナイ一つという編成が基本的である。普段は結婚式やイスラーム断食明けの大祭、犠牲祭祀の他、商店開店の祝いにもよく聞かれるものである。しかし、各地域によってその演奏スタイルは様々である。ホータン地区では一人が三つのナグラを演奏する例もあるし、複数の奏者或は四人一組として一定の複雑なリズムを平等に分担して演奏する方法も用いる。そこでスナイと合奏するとき、そのリズムはどの

ように表現されるか、特にナグラの即興的な演奏技法と音楽のリズムとの関連は興味深い問題である。

ウイグルの鼓吹楽が舞台芸術として演奏されるようになったのは 1970 年以後である。十二ムカームのメシュレップ部分とトルファン・ムカームのナズルコムはその例である。

本発表では、イリムカームの一部をなす「イリ鼓吹楽十二套」を例に、その楽団の編成、楽器の構造、リズムの変化について、典型的なパターンをいくつか抽出して論じる。

(報告・柘植元一)

本研究発表は中国新疆ウイグル自治区に伝承されている「ナグラ・スナイ(鼓吹楽)」をめぐる、ナグラ(鉄鼓)とスナイ(唢呐)の名称と構造と形状、合奏形態および演奏スタイルを具体的に記述し、楽器の歴史と変遷(改良)を考察したものであった。

発表の焦点は 1970 年以後、ナグラ・スナイが舞台芸術として演奏されるようになってからの展開に置かれ、十二ムカームのメシュレップ部分やトルファン・ムカームのナズルコム、そして「イリ鼓吹楽十二套」などが例にあげられ、そのリズム構造が解説された。

発表の冒頭に引用されたウイグルの諺「ナグラ・ドンバクが響かない結婚式は、結婚式と言わない」が端的に示すとおり、この鼓吹楽は古来イスラーム世界の民衆の生活と密接に結びついてきた。ウイグルのナグラ・スナイにとどまらず、広く西アジア・中央アジアのナッカーレハーネやダブルハーネ(野外の祭礼楽や軍楽)との歴史的関連など、より広い視点からの多角的な考察が、今後の課題として望まれる。

## ●報告

自動採譜のインタラクティブ・アプローチについて

フベルトス・ドライヤー(東京芸術大学)

新堀欽乃(東京芸術大学)

(発表要旨)

メログラフが 50 年代に発明された当時は、機械によって「客観的」な採譜を作ることができるという期待があったが、その後、例えば Jairazbhoy などによって、様々な理由からその客観性が疑われてきた。そして現在も、メログラフ以外のより新しいアプローチで自動採譜を行ったとしても、あらゆる音源を確実に採譜できるとは限らない。一方、人間の聴覚のみでは正確に採譜できない音楽現象が存在することも、否定しがたい。「人間の耳に助けになる」という自動採譜のアプローチを見いだす第一歩として、自動採譜の機械の諸問題やその背景を理解する必要がある。

その問題は、どのアプローチであっても、二種類に分けることができる。第一に、物理的・数学的(デジタルな自動採譜に使われるアルゴリズムの)問題がある。この問題は、例えば、ピッチ検出時の様々なエラー(オクターブ・エラーなど)やノイズの認識を含む。第二の問題は、人間の情報処理に関連するもので、その最も重要なものは音のオンセット検出に関わる問題である。これら二つの問題を、ある程度まで解決する方法はあるものの、その方法は機械の利用者にとってブラック・ボックスである。例えば、オンセット検出の精度を高めるために、機械の開発者は様々な音のサンプルを機械に聴き取らせて訓練を行うが、我々は訓練のためにどのようなサンプルを使用したのかを知らない。しかし、もし自動採譜の結果を再生して人間の耳と機械の間のフィードバックを作ることができるならば、より正確かつ詳細な採譜結果を得ることができるであろう。

もともとピッチ・コレクションのツールとして開発された Melodyne(メロダイン)のソフトウェアは、採譜について様々な方法で操作が可能であり、その操作の結果を直ちに再生することもできる。それゆえ、人間と機械の間のフィードバックに対して多様な可能性を提供することができる。

本発表では、ご詠歌における装飾音を例に取り上げ、フィードバックによる採譜方法を具体的に説明した。発表者の新

堀は博士論文(2008年度)において、密厳流ご詠歌の2004年の録音を五線譜に採譜した。その際、渡邊・中島2名のうたい手のアヤ(音高が変わる際に声を揺らす技法)について同じ採譜結果を得たが、新堀自身は音色や音量などに両者の差異を聞き取ったため、五線譜の採譜に表し得なかったアヤの違いを、今回、メロダインで分析した。

分析方法として、タイム・ストレッチ(演奏時間の引き延ばし)やピッチ・モデュレーション(音高調節)、人間の手による音のスプリット(音の分割)などの操作を行い、アヤの細部を、まるで聴覚の「顕微鏡」で観察するかのように、明らかにすることができた。その結果、渡邊のアヤは中島のアヤに比べて、主に、①声を揺らす際の音程が広く、②短時間のうちにより細かい声の揺れが入っていること、また、③渡邊のアヤにのみ、声を急速に揺らした後、音をわずかに延ばす技法(音を「モツ」とも呼ぶ)が見られることを指摘した。

(報告・近藤静乃)

発表では、Melodyneの機能に関する概説のあと、御詠歌の装飾音「アヤ」のサンプル音源とともに、分析の過程と結果のPC画面がスライドで具体的かつ効果的に示されたので、PCの難解な事項に戸惑いながらも、聴衆は自分の眼と耳で実際に確認することで理解が深められたように思う。

質疑では、蒲生美津子氏から、歌詞による違いを考慮したか(母音から子音への変化など)という問いがあり、今回検討しなかったが、耳で聴取するかぎり他のアヤの部分でも同様の特色が認められるとの回答があった。また谷口文和氏から、1.この分析は音をピッチに還元して離散的(discrete)に扱っているが、アヤのようにピッチの連続的な変化として現れる装飾音に対してどの程度有効か、2.平均律以外の音律の分析は可能か、という問いがあった。これに対し、Melodyneの決して少なくない測定誤差(10%程度)を認めつつも、1.単なる波線では音型を理解しにくい、Melodyneはスプリットを自由に加えられ、誤測定箇所の修正や再生もで

きる、分割の正否を検討することが可能(機械と人間がインタラクティブであるということ)、2.音の範囲は7セント(半音の1/10以下)まで設定可能、という回答がなされた。

## 会員の声 投稿募集

1. 次号締切: 2010年5月30日(6月初旬発行予定)
2. 原稿の送り先および送付方法:  
学会本部事務所(郵送、Fax またはメール)  
〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号  
Fax: 03-3832-5152 E-mail: LENO3210@nifty.com
3. 字数および書式: 25字×8行程度(投稿者名明記のこと)
4. 内容: 会員の皆様お知らせたいと思う情報  
(1) 催し物・出版物などの情報  
研究会、講演会、演奏会、CD、書籍出版、展示、見学会など、会員の皆様お知らせたいと思う情報。  
(2) 学会への要望や質問  
支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望

\* 原稿の採否は、支部より担当者にご一任下さい。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えさせていただくことがありますので、ご了承ください。

(東日本支部担当)

\*\*\*\*\*

発行: (社)東洋音楽学会 東日本支部

編集: 塚原康子、岡崎淑子

近藤静乃、鳥谷部輝彦、山下正美

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

東京芸術大学音楽学部楽理科 塚原研究室気付

Tel: 050-5525-2357・2350 Fax: 050-5525-2522

E-mail: tsukahar@ms.geidai.ac.jp(塚原)

\*\*\*\*\*